



1.

昭和20年8月6日。広島の人々はいつも通りの朝を迎えていました。仕事へ行く人、学校へ行く人、行き交う路面電車はどれも満員でした。

家の中には、赤ちゃんにお乳をやるお母さんがいました。手をつないで外を歩く幼い兄弟もいました。小学校で体操をする子どもたちもいました。

そこへ原子爆弾が落とされたのです。広島は一瞬のうちに焼け野原となり、たくさんの人々の命が奪われました。

これからお読みする詩は、原爆により子どもを亡くしたある母親が、病室で書き綴ったものです。

重い原爆症で長い入院生活を強いられながらも、母親は、亡き子どものことをずっと思い、詩を書き続けました。



2.

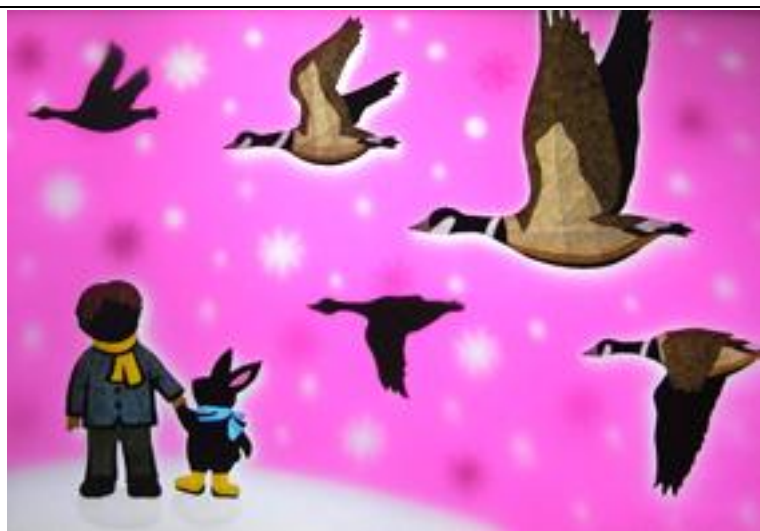
「母」大平数子

風さん、風さん、風さん
あなたが世界中をくまなく吹いて、
どこかで私の子どもをみかけたら、
私が、待って待って待ちくたびれて、
それでも望みをすてないで、
まだ待っているからと、
あの子に伝えてくださいな



3.

お月さん、お月さん、お月さん
あなたは1年365日、
そうして歩いておいでだから、
あなたはなんでも見えるでしょうから、
私の子どもが、
道が多くて帰れないと泣いていたなら、
迷わずまっすぐ帰ってきたらいいと、
教えてやってくださいな。



4.

がんさん、がんさん、がんさん
あなたが帰って行く北の国に
もしも私の子どもが寒さにふるえていたなら、
私がおまえを探していたと、
私の子どもに言ってくださいな。



5.

月のいい晩は、
私は笛を吹いて待っていると、
あの子に教えてくださいな。



6.

雨の降る晩には、
カラコロ高下駄をならして帰ってくる道を
歩いていると、あの子に教えてくださいな。

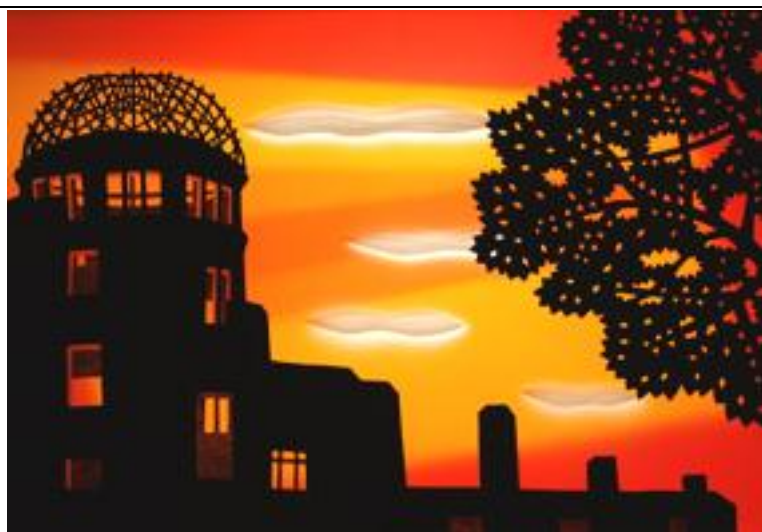


7.

つばめさん、つばめさん、つばめさん、
あなたがいた南の国に
もしや私の子どもが帰るのを忘れて
遊んでいやしないでしょうか。

あの子はものおぼえのいい子だから、
きっと私を思い出してくれるでしょう。
けれど南の国はあつたかいから、
南の国は、いっぱい、いっぱい、花が匂っているから、
花の香りに迷って、私の子どもが帰るのを忘れてるかも
知れないのです。

もしあなたが、私の子どもをみかけたら、
私が待っているからと、
あの子に教えてくださいな。



8.

この詩の作者、大平数子さんのように、
原爆で子どもを亡くした母親が、当時の広島にはたくさんいました。
両親や兄弟を亡くした子どもたちも、たくさんいました。

日本は世界で唯一、原爆が落とされた被爆国です。
投下された8月6日は広島で、8月9日は長崎で、今でも毎年平和祈念式典が行
われ、世界中の人たちがお参りに訪れます。

どうぞその日は皆さんも、そっと手をあわせてください。
そして、原爆のこと、この詩のことを、時々思い出してください。

～注意事項～

▲影絵は、水滴に弱いので濡らさないようご注意ください。

▲台紙のトレーシングペーパーが破けたり、傷ついたりしないようご注意ください。

▲もしも、紙がはがれかけたら、「スティック糊」で軽くとめてください。

（*液体糊は、シワになります）

裏面カラーフィルターは、セロテープで補整してください。

▲大平数子さんの詩は、朗読するのに読みやすいよう、ひらがなを漢字に置き換えた箇所があります。

この詩は、大平さんのご遺族の許諾を得て紙芝居にしています。

▲プロローグ、エピローグ部分は、対象者等に合わせ、自由に書き換えていただいて結構です。